

教育実習を終えて

日本語日本文学科 4回生
坂本理佳

長いようであつという間に過ぎた母校での三週間でした。初日から三日間は、大雨の影響で休校が続
き、控室で教材研究をしていました。その時は、「早く生徒と関わりたい」「授業をしたい」と思ってい
ました。しかし、いざ授業をしてみると、教材研究をいくらしてもし過ぎることはないのだというこ
とを痛感しました。また、指導案を作成する際に、「必ず生徒に言わなければならないこと」「余裕があ
れば言うこと」などのように、優先順位をつけて組み立てることの大切さを学びました。生徒に教えたい
ことを沢山詰め込みすぎると、時間に余裕が無くなり、授業中は生徒も自分自身もしんどくなってしまう
のだということ、指導教諭から教えていただきました。

教材研究をする上での課題の他に、授業をする度にさまざまな課題にぶつかりました。その中でも、
「授業にメリハリをつけること」「生徒が答えやすいような発問を心がけること」を最後まで意識して取
り組みました。発問を明瞭にすることがこんなにも難しいとは思っていませんでした。発問が分かりに
くいため、生徒から思うように答えが返ってこないことがありました。そこで授業全体の流れが止まっ
てしまい、指導案通りに進まず、時間内に指定の範囲まで終わらせることができないこともありました。
指導教諭が発問の仕方などをアドバイスしてくださり、次の授業ではスムーズに、時間内に終わらせる
ことができました。また、研究授業でもこのことを生かすことができました。更に、内容に沿った身近
な話をしたり、写真などを使うことによって、授業にメリハリをつけることができたように思います。

授業をする度に新たな課題が出てきて挫折しそうなこともありましたが、指導教諭のアドバイ
スを参考にし、課題を一つ一つ解決できたように思います。授業を重ねるごとに、前回より良くなって
いくことが分かり、とても嬉しかったです。また、初めは緊張して指導案通りに授業することで精一杯
でしたが、途中からは余裕も出てきて楽しんで授業を進めることができました。

この実習を通して、教員という職業の大変さを、身を以て実感しました。思うようにいかず、心が折
れそうになることもありました。しかし、生徒が「授業分かりやすかった」と言ってくれたり、「楽しかつ
たよ」の一言にとっても感動しました。

大好きな母校で、生徒や先生方、指導教諭に恵まれ、その中で教師になるための一歩を踏めたことを
本当に幸せに思います。毎日が充実していて実りある三週間でした。この実習で学んだことを生かし、
次は本当の教員として教壇に立ちたいと思います。

最後になりましたが、お世話になった先生方、本当にありがとうございました。

教育実習を終えて

英語英米文学科 4回生
馬 瀬 莉 子

私は母校の高校で三週間の教育実習に行ってきました。教育実習に行く前は私が受け持つクラスの生徒たちと馴染めるかどうか、また模擬授業の時の練習を生かして自分らしい授業ができるのか不安でいっぱいでした。実習に行く前の心構えとしては、実習を通して多くのことを学ぶという積極的な姿勢を大切にしようと思いました。

私が受け持ったのは進学クラスの二年五組でした。クラスの雰囲気は和やかで、気さくに声をかけてくれる生徒が多くコミュニケーションがとりやすく、また授業では勉強に真面目に取り組める、メリハリのつけられる生徒が多い、という印象を持ちました。生徒たちの笑顔を見られ、三週間頑張っていこうと改めて思えることができました。

一週目は指導教官の授業を見学させていただいて、授業の流れを把握することから始まりました。そして、二、三回の見学のあと、指導教官に代わって私が授業をしていくことになりました。実習での初めての授業は、私自身も納得できる授業ではありませんでした。もっと生徒参加型の楽しい授業にしていきたいと思いました。指導教官からの助言もいただき、相談をしながら、指導案の改善を試みました。私の目標として、ひとつ前の授業より少しでもよい授業にしようという思いがありました。

二週目からは勉強面だけでなく、生活面での指導も始まりました。例えば、朝の校門街頭指導や、服装チェックなどがあります。また二週目では、二学年すべてのクラスで授業を行いました。いろいろなクラスで授業をして思ったことは、クラスの雰囲気によって教師は授業の進めるペースや内容だけでなく、話し方やもっと言えばキャラクターも変えていかなければならないということでした。どのクラスでも同じ指導案、同じ指導方法ではうまくいかないということを改めて感じることができました。

三週目は模擬授業の準備があり今まで以上に指導教官と指導案のチェックと改善を重ねました。模擬授業本番は、百点満点とは言えないかもしれないけれど、自分のできることはやれたと思います。指導教官を始め、教員のみなさんや同じ実習期間を過ごした実習生、そして何より生徒たちのおかげで私の中でのベストの授業ができたのだと思います。

この三週間という実習で、教師という職業のやりがいや大変さ、そして責任の重さを感じました。この教育実習の経験は私にとって宝物になりました。

教育実習を終えて

神戸国際教養学科 4回生

多田菜摘

私は三週間、母校である中学校で教育実習をさせていただきました。三週間の実習期間中、一日一日が学ぶことばかりでした。

実習初期は、生徒にどのように接していったらよいのか分からず、とにかく授業参観を積極的に行ったり、休み時間も廊下などにいるなど、生徒とのコミュニケーションをとれる機会を多く持つようにしました。すると、生徒も徐々に話しかけてくれるようになり、生徒の性格や雰囲気を少しずつですが感じ取ることができるようになりました。授業と休み時間では、また違った生徒の様子を見ることができるので、休み時間もコミュニケーションをとるには大切な時間である、と思いました。また、私が実習をさせていただいた時期は、体育大会や試験期間という行事が多く重なる時期でしたが、こうした行事を通してコミュニケーションをとることができ、生徒との距離をさらに縮めていくことができたように感じます。

授業実習については、生徒の興味関心をひき、学習意欲をアップさせる授業ができるよう研究してきました。特に、パワーポイントや資料を多く使った授業は、生徒の参加率が高いということを感じたので、私も授業の中で取り入れました。しかし、ただ単に資料を見せるだけになってしまうことが多く、資料から何を読みとって欲しいのか、資料から伝えたいことは何か、ということをも自分が意識して授業をしていくことが大切であると感じました。

「え〜っ」という驚きがあるだけで生徒の学習意欲は一気にアップするので、そんな授業を目指して、教材研究には時間をかけました。同じ授業をしても、教材研究により時間をかけた方は生徒の参加度も高くなり、私自身も自信を持って授業に取り組むことができました。研究授業では、授業のねらいに到達しきれずとても反省しましたが、ワークシートや連絡ノートの感想等から、生徒たちがとても真剣にテーマに取り組んでくれたことを知ることができたことが何よりも嬉しかったです。

学級経営についても多くのことを学ばせていただきました。どのタイミングでどのような話を生徒たちのどの部分に語りかけるのか、ということの難しさと大切さを感じました。

三週間という実習期間は、終わってみるとあっという間でした。毎日の生活で生徒と関わるのが勉強で、毎日いろいろな表情を見せてくれる生徒たちは本当にかわいかったです。私の授業も、生徒たちが積極的に参加してくれたことで助けられた部分もたくさんありました。短い期間でしたが、生徒との信頼関係を少しではありますが、築くことができたのではないかと思います。三週間の実習期間で実習前より自分自身とても成長することができたと感じました。実習を受け入れてくださった先生方、そして何よりも生徒たちに感謝の気持ちでいっぱいです。

教育実習を終えて

史学科 4回生
志 岐 美由紀

教育実習生として、母校である大阪市内の女子校で4週間お世話になりました。中学と高校の免許を取得するためには3週間の実習期間が通常ですが、学校側の事情により1学期に2週間、2学期に2週間と計4週間の実習をさせていただくことになりました。

私のクラス担当は、高校1年生の看護コースで、授業担当は、同じ高校1年生の世界史Aでした。担当クラスの生徒たちは、全員、遅刻や欠席が少なく元気で明るいクラスでとても接しやすく運営しやすかったです。しかし、元気がありすぎるのか、授業開始時や終礼時など、担任の先生や私が教壇で喋っているにもかかわらず、騒がしいときが多々ありました。静かになるまで待ってみたり、声を張り上げて注意したり、直接席まで行き個人的に注意を促す等、生徒たちに授業と休憩時間のメリハリをつけさせることが日々の課題でした。

授業面では、私の担当してくださった先生は、とにかく経験することが大事だという方針で、実習3日目の1時間目から先生が担当しておられる高校1年生全6クラスの授業をすべて担当することになりました。最初の授業までにもう少し時間があると思っていたので、正直焦りました。しかし、失敗を恐れず挑戦しようと思い、自分なりの目標もいくつか決めました。目標の内容は、元々、声が通りにくいので大きな声を出すこと。字は大きめに書くこと。世界史に興味をもってもらうために教科書に載っていない史料や写真をみせたり、小話を挟んだりすること。一方的な授業ではなく発問を増やして生徒参加型の授業にすること。授業アンケートをとることです。

このように、授業を楽しんでもらおうと意気込んでいたのですが、実際に教壇に立ってみるとかなり緊張してしまい、声も大きく出していたつもりが後ろの席の生徒には聞こえにくかったり、指導案通りに進まず発問を忘れて一方的に授業をしてしまったりと、なかなか思い描いていたように進みません。生徒の反応も実習生の授業をまじめに聞いてくれる子もいれば、初めから興味がなさそうに自分の世界にはいってしまう子がいるなど、教壇からみると一目瞭然で自分の力不足が目立ち、とても悔しかったです。しかし、授業後の指導教官のアドバイスや他の先生の授業見学で得たことを活かして授業を重ねていく内に、分かりやすい授業をすることはもちろんですが、1コマの授業内で一番伝えたいことは何か、指導案通りに行かなくても、生徒の興味を引き出し印象に残るような授業をしていくことが大切だと学びました。最後の授業の時に生徒から「先生の授業で嫌いだった世界史がちょっと楽しいと思えたよ。」と言ってもらえたときは、目頭が熱くなるくらい嬉しかったです。

4週間の実習中にクラス担任や授業面だけでなく、生徒とのコミュニケーションのとり方や行事のときの対応など、ほんとうに様々な経験をさせてもらうことができ、教師という仕事のやりがいも改めて感じました。お忙しい中、私のために時間を割いてご指導してくださった先生や、生徒たちへの感謝の気持ちを忘れず、実習で学んだことを活かして、教師になるという夢を絶対に叶えたいと思います。

感動と充実の4週を終えて、今

教育学科 3回生

中村 明日香

私が教育実習を通して学んだことの中で、最も深く印象に残ったことは3つあります。

1つ目は、授業の難しさです。私は、授業を行うにあたって、机間指導の時間を設けること、チャイムと同時に終わることの2点を意識しながら進めました。意識しすぎると、時間を余らせてしまうこともあり、授業をするのに慣れてくると、児童の様子を見ながら進められるようになりました。「児童の発言を繰り返さない」と先生から指導していただき、児童の発言に対する反応や返しも分かってきました。研究授業は3週目と4週目に1つずつしたので、指導案の作成や、掲示物の準備など頭が回らなくなるくらい大変でした。しかし、「可愛いみんなのために頑張ろう」という気持ちで頑張れました。そして、研究授業は楽しかったと思えた授業ができたので大満足しています。授業を進めるには、常に先のことを考えることが大切です。また、児童の発言があってからこそその授業だと改めて感じました。

2つ目は、子どもたちの力です。音楽会の練習が始まった時期だったので、鍵盤ハーモニカの指導もしました。最初は全員で合わせることさえ難しく、なかなか進みませんでした。中には、楽譜を持ってこない児童や、床に寝転がって鍵盤を吹こうとしない児童もいました。私は、その児童たちにマンツーマンで指導していくうちに、「皆と一緒に吹けるようになりたい」という気持ちを持っていること、どんどん上達していることに気づきました。子どもたち一人ひとりの力は素晴らしいです。その力をどう伸ばすのかが、教師の役目だと思いました。私は、成長の手助けになればと、毎日表彰状をあげていました。

3つ目は小学校教諭の仕事のやりがいです。授業の準備を初めとし、保護者への連絡、問題の対処、学校行事の準備、校外学習の下見、家庭訪問などたくさんの仕事があります。私は、朝7時半には学校に着いていましたが、既に先生方がいらっしゃって、児童が元気に登校できるように、教室づくりがしてありました。実際、児童と過ごす時間よりも、翌日の準備をする時間の方が長いです。そして、準備したら準備した分だけ見返りがあります。私は未だ教師の仕事の半分も知らないと思いますが、実習を終えた後の満足感や充実感は、今まで体験したことのないくらい大きかったです。

最後に、教育実習を終えて、自信を持つことができました。今まで、大学で模擬授業をしましたが、45分間したこともなく、不安でいっぱいでした。大勢の人を前にすると、緊張して声が震えてしまうこともありました。しかし、子どもたちを前にすると堂々と話せている自分に驚きました。何度も授業を行っていくうちに、「先生の勉強面白かったよ」「今日も先生授業して」「今の勉強が今までで一番楽しい」と言ってくれる児童もいました。1回目の授業と最後の授業を比べると、自分の成長が板書で分かります。私は、子どもたちと共に成長しました。

初めの頃は、名前を覚えるのに必死で、ほめたり叱ったりする余裕がありませんでした。しかし、コミュニケーションをとるうちに、個に応じた指導の仕方が分かってきました。「絶対先生になって帰って来てな」「中村先生みたいに頑張るから、先生も試験合格してな」ときらきらした笑顔で言ってくれた子どもたちに胸を張れるような教師になりたいです。教育実習で過ごした日々は私の宝物です。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

金澤朋子

教育実習の中で一番考えたことは、「自分は小学校の教師に向いているのか」ということです。私は、小学生の時に友だちに勉強を教えてあげることが多く、「わかった!」「ありがとう」と言ってくれるのが嬉しかったという経験から漠然と小学校の先生になりたいという夢を抱いていました。大学に入り、専門性を磨く中で教師の責任の重さや大変さを知り、私は教師に向いているのだろうか悩む時もありました。しかし、実習を通して自分の考え方が変わり、教師という職のやりがいに気付いた4週間になりました。

実習で学んだことは大きく分けて2つあります。

まず1つ目は、「授業で知識をつけさせることだけが仕事ではない」ということです。もちろん教材や課題に向き合い、児童にとって分かりやすく楽しい授業を展開する工夫も大切です。そのために実習中は、先生方に懇切丁寧にご指導いただきながら指導案を訂正したり教材研究を繰り返したりして、授業に臨みました。授業中は、子どもたちが積極的に発表して授業を盛り上げようとしてくれました。授業は教師だけではなく、児童と一緒に作り上げるものであるとともに、そのためには、日頃からの教師と児童の信頼関係が大切であることを実感しました。

また、上記に加えて教師の大きな役割だと感じたのは、児童の豊かな心を育むことです。ある休み時間に、「友だちが鬼ごっこに入れてくれなかった。」と相談に来た児童がいました。このことをすぐに担任の先生に報告すると、次の授業でクラス全体の問題として、子どもたち自身に仲間の大切さについて考えさせる機会が設けられました。嫌なことがあっても表に出さない児童もいる可能性があるため、常に広い視野をもち、トラブルを発見すれば、その時その場で指導することが重要であることを学びました。

学んだことの2つ目は、「生半可な気持ちでは教師は務まらない」ということです。これは実習担当の先生だけではなく、いろいろな先生方からご指導いただく中で一番印象に残っている言葉です。私は「子どもが好き」「勉強を教えるのが好き」と初めに述べましたが、このような気持ちだけでは務まらないということです。「子どもが好き」であることは大前提として、教師になってからも目標をもち続ける向上心と、妥協しないことが重要だと思いました。全国にはいろいろな小学校があり、学校や子どもの雰囲気、地域性は様々です。教師になってから、いろいろな壁や困難が多々あると思いますが、常に向上心をもち、子どもたち一人ひとりと向き合う中で長所を認めて、一人ひとりの可能性を引き出すことができる教師になりたいです。実習において、私は授業や休み時間を通して、毎日クラス全員とコミュニケーションを取りました。一緒に遊んだり会話をしたり、客観的に観察したりする中で、必然的に一人ひとりの個性を見つけることができ、すべての児童の長所を見つけました。私はその時に「児童自身が友だちの長所を互いに認め合えるような学級経営をしたい」と強く思いました。

最後のお別れのときに子どもたちが「先生になって、この学校に戻って来てね。」と言ってくれた言葉が心に深く残っています。4週間お世話になった先生方や子どもたちへの感謝の気持ちを忘れずに、必ず教師になって恩を返したいです。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

尾崎里奈

私にとって教育実習は人生で一番濃い4週間でした。

小学校には、大学の授業だけでは分からなかった、生の教育現場だからこそ学べるのが本当にとくさんありました。様々な場面の中で子どもたちと共に過ごす中で、子どもたち自身がどこまでやれる力があるのか、様子を見ながら指示や注意をするタイミングを判断できる力が「指導力」なんだということ学びました。指導力のある先生になるためには、子どもの実態をよく観察し、どんな力をつけてどんな風に育ててほしいのかという願いや思いをはっきりさせて子どもと向き合っていくことが大切だと感じました。

私が担当した6年2組はとても落ち着いていて、集中力があるクラスでしたがその反面、授業中、手の挙がる数が少ない、全体的におとなしいクラスだなという印象もありました。ちょっぴり大人に近づきつつあって、でも子どもの部分もある…そんな子どもたちとの関わり方について最初の内は分からないことだらけでした。私が担当したクラスでは毎日日記の宿題があり、4週間担任の先生の代わりに日記帳を点検してコメントを書かせてもらっていました。まずはそこで子どもたちのことを知り、信頼関係を築こうと思い、日記をしっかり読んで丁寧にコメント返すように心掛けました。一人ひとりを理解しようとし、一人ひとりに真心で接するというのを常に心掛けることでだんだんと良い関係を築いていくことができたように思います。

授業実習については、私は研究授業の教科は算数と決めていたので、担任の先生と相談して「比例と反比例」の単元をすべて担当することになりました。何とか乗り切って終わらせても、前もって準備をして教えるべきことに力を注いでも、同じ45分。教師が45分の授業に対してしっかり万全の準備をして臨まないと、伝えたいことをすべて伝えることはできないと分かりました。私が研究授業に算数を選んだのは、自分自身算数が苦手で、今まで苦労してきたからでした。そこで、自分が躓きそうな部分を考慮しながら、とにかく丁寧な授業を心掛けるようにしました。そして、みんなが失敗を恐れず発表ができるようになってほしかったので、比較的簡単な発問も増やして誰でも手を挙げやすい授業を目指しました。

実習中は、その日一日のまとめや次の日の授業の準備をしていると、夜は寝る暇も無く常にフラフラな状態でした。そこにクラスの子どもたちとどう関わって良いのか分からない中で慣れない授業実習と、体力的にも精神的にもしんどくて、苦しいことも、悩むこともたくさんありました。でも、最後の日に子どもたちから、日記帳の返事が楽しみで日記帳を開くのが毎日楽しみだった、算数の時間に発表ができるようになった、尾崎先生なら絶対いい先生になれるという言葉がたくさんもらい、口数も少なく大人しい子どもたちただけに、私にくれたその一つ一つの言葉がとても心に滲みて涙がたくさん溢れました。4週間私が心掛けてきたことも、子どもたちはしっかり受け止めてくれていて、ちゃんと伝わっていたということが分かりとてもうれしく思いました。自分が諦めなければ伝わるものは必ずあると、6年2組の子どもたちが教えてくれました。

4週間、担当クラスをはじめ、子どもたちは私のことを「先生」として見てくれました。笑顔で話しかけてくれたり、困ったときは助けを求めてきたり、分からないことを尋ねて来たりして、子どもたち

から教師を頼って来ることもあるし、子どもにいろいろな声をかけたり、褒めたり、注意をしたりして、教師から子どもに寄り添っていくこともあります。そんな毎日の中で、「子どもたちを守り、育てていくのは親や教師を含め、大人の役割。私もたくさんの人に守られ、育ててもらってここまで大きくしてもらいました。今度は自分が、子どもたちに寄り添い、たくさんのパワーをもらいながら自分も一緒に成長していけたら…」という思いが生まれ、その思いが私の教師への憧れを強くしていきました。教師という道に進むか迷っていた私でしたが、この実習を終えて頑張って先生になりたいと思えるようになりました。4週間全力でやりきったという自信と、支えてくれた子どもたち先生方への感謝の気持ちを忘れずに、これからも頑張っていきたいと思います。



教育実習を終えて

教育学科 3回生
番 場 ももこ

私は9月2日から9月27日まで母校での教育実習を行いました。なかなか実習が始まるという実感がわかず、不安もいっぱいある中で始まった実習でしたが、18日間「小学校教師の仕事」に触れ、その楽しさや難しさを感じ、私にとって毎日が新しい発見の連続でした。実習は決して楽しいことばかりではなかったけれど、実習の18日間は濃縮された意味のある時間だったと、こうして時間が経った今も思います。今回の実習を通して私は、2つのものを得ることが出来ました。

まず一つ目は子どもたちとの交流から得た「自信」です。私はこの実習で1年生を担当しました。20名ほどの学級です。4週間の中で一番多くの時間を過ごしたのがこの1年生の子どもたちでした。私は、学校にいる間はできるだけ多くの時間を子どもたちと関わる時間にしようと決めて実習に臨みました。始めのころは、学級の様子や一人ひとりの児童を知るために、授業だけでなく休み時間を主に1年生と関わっていきましたが、それからはできる限りいろいろな学年の子どもと関わる機会も持つようにしました。子どもたちと関わって行く中で、自分が思っている以上に、子どもたちはいろいろなことを学び、考えているということを感じ、私が教師として子どもたちに何か教えるよりも子どもたちから学ぶことの方が多くありました。子どもたちとの関わりを通して一番印象に残っていることは、お別れ会です。実習の最終日、クラスの子が企画をしてお別れ会をひらいてくれました。歌や遊び、手紙など子どもたちが考え準備をしてくれたそうです。お別れ会の挨拶で担任の先生がおっしゃった「こんなにクラスみんなが一生懸命に何かをしている姿は初めてでした。」という言葉、子どもたちと過ごした時間の中で私も子どもたちに何か残してあげることが出来たのかもしれない、そんな気がしてとても嬉しかったです。こうして子どもと関わる中で教師という仕事に改めて魅力を感じ、今まで以上に教師になりたい気持ちが強くなりました。

授業実践については実習を通して特に発見と課題が多くありました。そこで私は自分自身の「本当の課題」に気付くことが出来ました。一週目からいろいろな学級の授業を参観させていただき、担当である1年生の学級では空き時間があれば授業を観察したり、参加したりしました。私が実際に授業を行ったのは二週目からです。授業実践は、毎回反省と課題改善の繰り返しでした。授業の度に浮かび上がってくる改善点は毎回の授業によってさまざまに思えるようにいくものにはなりません。何度か授業を重ねるうち、「時間配分」そして「ほめる」というのが自分に足りていない部分だと分かってきて、この2点に注意して実習16日目、研究授業に臨みました。結果的にこの研究授業を通して、私は大きな課題を見つけることが出来ました。それは、子どもたちのやりとりの仕方や教師としての振る舞い方についてです。実はこれまでも、同じことを指摘されたことがありました。「女優になること。」教頭先生に言われたこの言葉がとても印象に残っています。教師として子どもの前では教師を演じること、それが今の私に足りていないものと再確認しました。参観していただいた多くの先生方からご指摘やアドバイスをいただき、自分では分からなかった課題に気付いて、新しいスタートに立ったような気持ちになりました。研究授業は私にとってこの実習での一番の山場であり、この日は心に残る一日になりました。

実際に小学校教師という仕事に触れ、正直に感じたことは楽しいことよりも大変なことの方が多いと

いうことでした。勉強を教えることだけが仕事ではなく、やらなければならないことはとても多いです。実習中の短い間にも思うようにいかず、嫌になることもありました。ですが、毎日子どもたちと関わり、子どもたちの日々成長する姿を見ることが出来、そのおかげで頑張ることが出来ました。こうしたところに、小学校教師の魅力を感じ、子どもとともに自分自身も日々成長していける、そんな教師になりたいと思いました。

実習の4週間で私が経験したことは、小学校教師のほんの一部にも過ぎないことだと思います。しかし、こうして、貴重な経験が出来、無事に実習を終えることが出来たのも、ご指導くださった先生方をはじめ、多くの人々の支えがあったからこそだと思います。そして、ともに時間を過ごした子どもたち一人ひとりにも感謝の気持ちでいっぱいです。実習を終えて、新たにスタートに立つことが出来ました。この実習を通して学んだことを活かし、今後も一步一步前に進んでいこうと考えています。



幼稚園実習を終えて

教育学科 4回生
河野 舞

私は、1年間を通して2週間に1度、大学附属の幼稚園で教育実習をさせていただきました。実習生は4名ずつの2チームで各クラスに入り、私は5歳児クラスを担当しました。はじめは元気いっぱいの子どもたちと過ごす1年間が楽しみであると同時に、2週間に1度ということで「子どもの名前を覚えられるだろうか」「信頼関係を築くことができるのだろうか」など不安もありました。しかし、そんな不安は子どもたちの笑顔にかき消されました。そして、これまでの2週間の保育実習とは違い、長期的に子どもたちの発達を感じることができたとともに、実習の度に成長していく子どもたちの姿を捉えながら関わっていくことで私自身も成長することができました。実習を通して学んだことの中で特に印象的なことを述べたいと思います。

まず1つ目は、保育者の言葉かけです。これは実習の中で一番苦労した点でもありますが、保育者の言葉かけ次第で子どもの興味・関心に影響することがわかりました。例えば、竹馬の練習では「1日1回は竹馬に乗ろう」と声をかけ、少しでも乗れると、共に喜び合い子どもの自信につなげていました。合奏では「♪タンバ、カスタ、タンバ、カスタ、どっちもよ」と合奏曲の歌詞を変えてそれを子どもたちも口ずさみながら楽器を演奏していました。また、年間行事、特にクラスで力を合わせて行う行事を意識して、日頃から協力したり助け合ったりする場を設けて、少しずつ意識が芽生えるようにすることも大切だということを学びました。

2つ目は、子どもたち同士の関わりについてです。進級当初はまだ自分を見てほしいという感じでしたが、運動会頃から友だちと協力し合う姿が少しずつ見られるようになりました。うまくできない友だちにできる子が教えたり、自分がやりたいという気持ちを我慢したりと、お互いの気持ちを受け止めながら子どもたち同士で話し合っている姿も多く見られるようになってきました。さらに、行事に向けての取り組みでは、子どもたちと一緒に考えながら遊びを創り出し、さらに展開しているのが印象的でした。子どもの発想は私たちの想像を超えるものもあり、それをまとめながら進めていくことは大変かもしれませんが、自分の保育にも活用していきたいと感じました。

3つ目は、実習生のチームワークの大切さです。1クラスに4人ずつ入り、絵本の読み聞かせや制作、歌唱指導などの部分実習を行うことにより、指導案作成から当日まで活動内容や子どもへの関わり方について話し合う中で、自分とは違う価値観に触れることができました。また、実習生同士も4月当初はお互いのことをあまり知りませんでしたが、長期間の実習を通して他のクラスの実習生とも情報交換するようになり、さまざまな意見を聞き、受け入れ、提案することが徐々に実践できるようになりました。この学びは、新しい環境で保育士として働く自信につながりました。

この1年間の幼稚園実習では、保育者は子どもの成長を身近で見ることができ、共に喜び合える素敵な職業であると改めて感じるすることができました。たくさんの貴重な経験をさせてくれた子どもたち、お忙しい中、丁寧に指導して下さった先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

幼稚園教育実習を終えて

教育学科 4回生

三木 里恵

私は、この教育実習で数えきれないほど多くの大切なことを学ぶことができました。私自身、幼稚園に通ったことがなく、大学で学んだ幼稚園の生活しか知らなかったため実習前はとても不安だったのですが、明るく優しい子どもたちや熱心に指導して下さる先生方の中で、とても充実した4週間を過ごすことができました。その教育実習で学んだことの中でいくつか印象に残っている出来事があります。

まず一つ目は、「子どもたちへの関わり方」です。私は子どもたちが出来ることは見守り、出来ないことは挑戦できるように言葉を掛けたり、援助したりして関わっていくように心掛けていました。その中でも、教師の言葉掛けは大切で、言葉掛けひとつで子どもたちの活動への取り組み方が違ってくのだと感じました。初めの頃はどのように言葉掛けをすれば良いのかと難しく感じるが多かったのですが、先生方の言葉掛けを見て私も子どもたちに共感したり、提案したり、誘いかけたりする言葉掛けが出来てくるようになりました。

二つ目は、「臨機応変に保育をする」ということです。私はこの実習中、毎日降園前の30分間の時間を担当の先生からいただいていた。そこで私は手遊びや絵本の読み聞かせなどをしていました。でもその日その日で降園準備にかかる時間が違ったり、配る手紙の枚数が違ったりして、絵本を読む時間が毎日違っていました。短い時間で保育をしなければならない時は考えていた指導案の内容を変更して、手遊びを子どもたちが知っているものにしたり、一番だけにしたりして保育をしていかなければならないのだと考えさせられました。

最後は、「連携して保育をする」ということです。日々成長している子どもたちを一人で把握することはとても大変なことです。登園時や降園時に保護者の方とコミュニケーションをとって子どもたちの朝の様子を聞いたり、園での様子を話したりすることはとても重要なことだと思いました。また職員間でもその日の子どもたちの姿を話し合うようにして、少しでも多くの面を捉え、一人ひとりに適した援助や関わりをしていかなければならないと思いました。

私はこの実習を終えて幼稚園教諭の仕事の大変さややりがいに改めて気付くことが出来ました。この4週間で得たことを無駄にしないよう一生懸命努力して、笑顔いっぱいの素敵な先生になれるようこれからも頑張っていきます。

そして最後にたくさんの貴重な経験をさせてくれた子どもたち、忙しい中、丁寧に指導して下さった先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

教育実習を終えて

家政学科 4回生
道 清 穂奈美

私は加古川市立の中学校で3週間の教育実習をさせていただきました。母校ではないということもあり、始まるまでは不安でいっぱいでした。今思うと、この3週間はあっという間でしたが、とても充実していました。実際に教育現場に立つことで、様々な経験をする事が出来ました。

授業をさせていただいて、まず一番に「声」の大切さを実感しました。教師の「声」で授業は大きく変わります。大きな声を出すこと、声を張ること、話し方に抑揚をつけることが大切であると改めて感じました。また、教科書に書いてあるような難しい説明をそのまま教えただけでは生徒には伝わりませんでした。わかりやすい授業にするためには、どう言い換えれば理解してくれるかを常に考えつつ、教材研究に力を入れ、知識を増やすことが必要でした。一番の反省点は、家庭科の授業を生徒の実生活と関連させながら進めていけなかったことです。

この教育実習で初めて生徒の前で授業をしました。実際に授業をしてみて出た反省や課題は沢山ありますが、私にとって生徒とコミュニケーションをとることは授業をすることと同じくらい困難でした。はじめ、担当になったクラスは担任の先生の色に染まっていると感じてしまい、なかなか馴染むことが出来ませんでした。また、自分のクラスで授業をする機会がなく、生徒とコミュニケーションをとる時間も限られていました。しかし、生徒たちが毎日書く連絡ノートにコメントを書き込み、生徒一人ひとりとやりとりをすることで、その子が今何に興味があって、どんな悩みを抱えているのかなどを理解することが出来、少しずつですが距離を縮めていくことが出来ました。自分が壁を作っていたのでは生徒との距離は縮まりません。授業以外でも積極的に生徒の中に入って、まずは生徒一人ひとりを知ることが大切です。

この教育実習で得た課題は、これからの自分の目標として持っておきます。時間はかかるかも知れませんが、自信を持って教壇に立てるよう、素直に真面目に様々な経験をしながら、自分を磨いていこうと思います。

母校ではない場所での教育実習は本当に不安でした。私にとって最も存在が大きかったのは毎日共に過ごした実習生たちです。教室や体育館の場所がわからない私を連れていってくれたこともありました。仲間の協力があるからこそ人は進んでいけるということを改めて感じました。お世話になった先生方、協力してくれた生徒たちのことも忘れずに、これからも前へ進んでいきます。そして、教育実習最終日に生徒たちから貰ったこの言葉も忘れません。

「いつか本物の先生になって僕たちのところに戻ってきてください」

3週間本当にお世話になりました。ありがとうございました。

栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程 4回生

宮崎 聡美

5日間という短い間でしたが、1年生を中心に子どもたちと接し、研究授業をさせていただき、教師という仕事に触れ、とても濃い1週間となりました。

子どもたちと接していく中でまず感じたのは、教師として叱ることの難しさでした。1年生という事もありとてもやんちゃで、休み時間においても授業中においても叱らなければいけない場面が多々ありました。先生方に、“お姉ちゃん”になってしまわないように、授業と遊びのメリハリをつけることが重要だ、叱るときはその場でしっかり叱らないといけない、先延ばしにしてはだめだという話をお聞きしたこともあり、意識して子どもたちと接するようにしていたものの、始めのころは、自分自身クラスでのルールを把握できていなかったことに加え、どこまで口を出していいのか、どこまで怒って大丈夫なのか等と考えているうちに叱り損ねることが多く、なかなかうまくいきませんでした。3日目によりやくしっかり叱る事ができ、その後子どもから「〇〇さんが△△してきました。」など助けを求められるようになり、少し先生として見てもらえるようになったのかなと感じることが出来ました。しかし、子どもたちの話を聞いていると、つじつまが合わないことがあり、子どもを叱るためには、一人ひとりの事情をしっかり聴き、子どものことをきちんと理解したうえで迅速な状況判断をする必要があると学びました。

授業に関しては、私が力不足なうえに、やることがやまのようにあり、先生方のご協力なしではここまで仕上げる事が出来なかったと思います。栄養教諭の先生だけでなく、学年の先生や校長先生にもご指導いただき、様々なアプローチの方法を学ぶことが出来ました。小学校での1コマはたった45分ですが、先生たちの思いや努力が詰まった45分であることを身を持って感じました。

研究授業では、初めて子どもの前で授業をするのに加え、多くの先生方が見に来て下さったこともあり、メモすら読めなくなってしまうほど緊張していた事に加え、導入で思いの外時間をとってしまったため、その後ずっと焦った状態で授業を進めることになってしまい、様々なミスを導くと共に、子どもたちの学びを引き出すチャンスを逃す結果となってしまいました。栄養教諭は担任と違い、次の時間に続きをするといった融通も利かないため、時間配分をしっかりと計画・管理しておくこと、臨機応変に対応していくことの重要性を改めて感じました。

この5日間教育現場に入らせていただき、いろいろな現場ならではの話を聞くことが出来ました。家での教育はほとんどせず、学校にまかせっきりの家庭が増えていること、その事で年々教師の負担が増えているように感じる事、子どもには裏切られてばかりだということなど、教師という仕事の過酷さを知りましたが、それと共にやりがいも感じる事が出来ました。先生の「子どもたちをどうにかしてあげたいという気持ちがなければ、現場にいても迷惑なだけだと私は思う。この気持ちが無くなってしまった時が教師のやめ時やと思ってる。」という言葉聞き、どの先生も強い覚悟を持って子どもと向き合っているんだとわかり、私も先生方のような教師になれるよう頑張ろうと改めて気合いが入りました。

栄養教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科 4回生
榎 祥子

不安と緊張でスタートした教育実習。1週間という短い期間でしたが、数々の貴重なご指導を頂戴し、多くの経験をさせていただき、毎日が新しい発見と再確認の繰り返しでした。実際の現場を目で見て、肌で感じたことは、私自身を大きく成長させてくれました。

今回の実習では、2年2組に席を置かせていただき、栄養教諭としての仕事だけでなく、学級担任として、また、教師としてどのように児童と関わるのかをすぐそばで拝見させていただくことで、多くのことを学ばせていただきました。短い期間だったので、少しでも児童との距離を縮め、何らかの良い影響を与えることができればいいなという気持ちで児童との積極的なコミュニケーションを心がけました。授業風景をよく観察したり、休み時間には一緒に外で遊んだり、会話も積極的におこなうことで、児童の名前や性格、特徴をできるだけ早く覚えるように努力しました。最終日までには、クラスの児童全員と話すことができ、名前も覚えることができました。児童たちも、名前を呼ぶと少し驚いた様子で嬉しそうに返してくれたので、私も嬉しかったです。また、2年生ということで目線が低く、授業中も休み時間もあちらこちらから先生を呼ぶ声が聞こえてきて、一人ひとりの声に反応するのは大変でしたが、できるだけ視野を広げ、会話をするときはしっかり相手の目を見ることを意識しました。これらのことが教師と児童の信頼関係を築くためには必要であり、学校という現場には必要であると学びました。

研究授業では、好き嫌いの多い野菜を題材にし、ゲームを交えて興味関心を引き付ける内容にしました。媒体を作る際には、児童目線で配色やデザイン、字の使い方などを考えるようにし、少しでも印象に残るように工夫しました。先生方も熱心に指導してくださり、児童たちも私の授業をととても楽しみにしてくれていたもので、何度も何度も練習を繰り返し準備しました。授業が始まって、最初は不安や緊張もありましたが、児童たちはとても楽しそうに一生懸命話を聞いてくれ、私自身もとても楽しく授業をすることができました。実際に授業をして難しいと感じたのは、言葉のキャッチボールでした。児童たちの発想はおもしろく、予想できない答えがたくさん返ってきました。児童の発言を発展させ、個性や力を引き出すには、教師が的確な助言をしてあげることが大切であると学びました。そのためにも、さまざまな知識を身につけることや児童の立場に立って考えるということが大事だと感じました。

今回の実習を経験して、栄養教諭という職業は責任が重く、仕事量も多いですが、その分、児童や先生方、保護者からの期待や信頼も厚く、とてもやりがいのある仕事だと思いました。短い期間でしたが、先生方の熱心なご指導と、児童たちの元気な笑顔のおかげでとても充実した実習となりました。大学ではできない貴重な体験をし、たくさんのことを学ぶことができました。この経験を生かし、日々成長していきたいと思います。

観察実習レポート

教育学科 2回生
平 碰 千 里

1. スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

スクールサポーターと児童の関係は、先生との中間にいるということで親しみを持って接してくれているのが伝わってきましたが、児童によっては「お姉ちゃん」という存在になってしまったこともあり、その点において、私の教師としての意識が現場の先生とは違い、まだまだ低いということを見透かされている結果だと感じさせられました。

②教師との関わりから得たもの

現場の先生方には、クラスに入らせていただいた先生を中心に、児童の様子を観察するときの立ち位置や声の掛け方、給食指導など細かなことまで多くのことや、コツやヒントを指導していただきました。また、小学校では私たちが今している模擬授業のように盛りだくさんな授業内容というよりは、じっくりゆっくり授業が進んでいる感じを受けました。このような状況が小学校の現場であるのだということを先生の姿を見て感じました。

③学校という組織との関わりから学んだこと

警報のため、急遽下校になった際の下校のタイミングや保護者への連絡、迎えに来られた保護者の方への対応、自分で家に帰る児童の付き添いなどさまざまな点において、正確で迅速な判断が必要な場であるということを強く感じました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

教材研究：図画工作の授業において、教室内の机の並べ方や教材の置き方が、私の通っていた小学校とは全く違っていたので印象的でした。全員が教室の真ん中を向くように配置されており、友だちの作品や製作の様子がお互いに見えるように工夫されていました。教室の中心に色画用紙や授業で使用する教材などが置いてあり、児童が授業の見通しや興味が持てるような工夫もありました。また、製作中には、その授業にあった音楽が流れていて児童の自由な発想や創作意欲をのばす仕掛けがあり、教材ももちろんながら、雰囲気づくり、環境づくりに多くの試みや研究がされているんだと感じ、感覚にうったえるような力ののばし方を学べたと思います。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

児童一人ひとりを担任の先生は見ているようですが、深く個人と関わり時間をとって話ができないという場面がとても多いことを感じました。しかし、子どもたちは先生が大好きで休み時間にはいつも人だかりができていました。先生はすることがたくさんありましたが、子どもの話を後回しにせず、少しでも子どもと関わろうとしている姿から、授業はさることながら、やはりこのような普段のコミュ

ニケーションをおろそかにしてはいけなと学びました。ですから、スクールサポーターとしての立場では遊ぶ時間も話す時間も十分にありましたが、教師になってもこのように感じたことを忘れずに日々の生活に生かしていければいいなと思っています。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

仕方ないことではありますが、授業の関係で行ける期間に限られること。また、どこの小学校に配属されるかによっては、交通機関の時間や運行の本数の関係で移動が困難で授業に戻ってこられるのもギリギリだった人もいたように聞きました。

5. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

1年生の児童で担任の先生も授業中席に座らせておくのに苦労している子がいました。その子はとてもやんちゃであったため、私には蹴ったり、口に含んだ水を飛ばしたり、「あっちいけ！」ということをよくされていました。どうにか仲良くなれないかと思い、その子の好きなものを見つけるため持ち物や自由帳や掲示物の絵などにヒントはないかと意識して探していた甲斐があり、好きなアニメを知ることができました。そのアニメの話題で話しかけてみた結果、心を開いてくれたのか「あっちいけ」などと言われることもなくなり、「わからんから教えて」とまで言ってくれるまでになり嬉しかったです。ここまでくるには、スクールサポーターに行っていたほぼ全ての時間がかかりましたが、はじめは近くにも寄らせてくれなかった子が、最後の日に「先生と隣で給食食べたい」と言ってくれたのが忘れられません。歩み寄ろうとすること、コミュニケーションをとろうとするのはどんなに大切かを、改めて実感できました。

観察実習レポート

教育学科 3回生

中村 明日香

1. スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

6月に行ったときは「4年生に1年間入って、成長を見てください」と言われました。昨年と同じ小学校ですが、昨年は1、2年を見ていたので戸惑いました。しかし、担任の先生が子どもたちに「中村先生に交換ノートで質問してみよう」と子どもたちと距離を近づけるために工夫してくださったのもあり、あっという間に打ち解けることができました。子どもたちは本当に素直で、相手のことを考えて行動できていました。また、子どもたちは大人のことをよく見ていて、この先生なら信頼できる、できないと見抜いているので、教師も全力で答えなければいけません。

②教師との関わりから得たもの

「4年生に入ってください」と言われながらも、後半は2年生に入り、支援をしました。やはり、落ち着いて学習できる学級（4年）は教室も整っていて、ごみひとつ落ちていませんでした。掃除道具入れのほうき1本1本もまっすぐ片付けてあり、各自のファイルもきれいに並んでいました。今まで、1、2年の教室にしか入っていなかったこともありますが、4年生の完ぺきすぎる環境に驚きました。それは、子どもたち自身でしていることですが、裏には教師が意図して学級経営しているからこそできている空間です。

③学校という組織との関わりから学んだこと

昨年度と同じく、先生方が仲が良く助け合って学校が成り立っていると感じる部分が多々ありました。クラスでヒートアップした児童を教頭先生が別室に連れて行かれ、落ち着かせることもありました。信頼し合っているからこそ、できることだと思います。そして、学校全体で子どもを育てるという環境が整っていました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

なかよし学級（特別支援学級）には6人の児童がいました。みんなずっとなかよしの教室で勉強するのではなく、それぞれの教室で授業を受けたり、なかよし教室で勉強したりします。どのクラスもなかよしの児童がなかよし教室に行くとき「いってらっしゃい！」と言います。クラス全体でお世話をしているという雰囲気が出来ていて順番で当番が決まっています。自分で出来ることは自分ですという考え方が一人ひとりを成長させるんだと思いました。一人ひとりの発達の段階に合った指導も勉強になりました。「〇〇くんはひとりのできるやろ？」と先生が言うと、「俺、〇〇ちゃんの用意もする！」と友だちの用意もしてあげていました。通常の学級の児童と比べ、繊細な指導が必要だが、特別扱いではなく、自らやる姿勢をつくる指導もみられました。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

4年生のクラスに入っていたときは、先生の指導がきちんとされていたので、自分の役割を責任を持つてするという態度が出来ていました。先生方の声掛けや、ほめ方、叱り方が児童を伸ばすのだと改めて感じました。私が学級経営をするときに、教室の掲示物や机の向きなど大変参考になるものばかりでした。視覚的に成果を表すと児童は伸びるので、貼ってあるシールを見て、100点を目指そうとも目標を立てている児童もいました。

しかし、2年生のクラスでは、正直なところ、学級崩壊していました。1年生の頃は素直で可愛くて、学習態度も出来ていたので大変衝撃的でした。そのような現場を見ているので、少々のことではへこたれない忍耐力ができました。やはり、教師が一方的に叱るだけではなく、どんなに叱っても最後にはほめてあげることが大切です。また、安心して学習できる空間が教室になるよう、教師が信頼できる大人にならなければ学級は成り立たないと実感しました。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

スクールサポーターは、先生としてみてくれる児童はあまりいないです。先生というあだ名のような気がします。ですから、スクールサポーターである私が注意をしても聞かないですが、先生が叱ると聞くという場面がたくさんありました。なので、私は、出来るだけほめて子どもたちに接していききました。先生はどうしても全体をみると客観的になってしまいます。そこで、個別に声をかけていき、少しのことでもどんどんほめていききました。べったりと一人の児童につくとかまってもらえると、甘えてしまうので、クラス全体をみながら、支援をしていくようにすると良いと思います。

5. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

4年生の学級にて、先生がいらっしゃらないときのことですが、プリントを後ろに配ろうとした時に床に落ちてしまい汚れてしまいました。すると、さっと拾い、自分が汚れたプリントをとり、後ろの子にきれいな方のプリントを渡していました。少しのことですが、小さな気遣いができることは素晴らしいです。また、そのことを担任の先生に報告すると、「私の知らないところでの一面を中村先生から聞けて嬉しかったです」とコメントをいただき、私も嬉しかったです。

6. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

学級崩壊しているクラスに入ったのが初めてだったので、戸惑いもあり、どうやって支援していいのか分かりませんでした。スクールサポーターは先生ではなく、お姉さんとしてしか見られていないところもあります。なので、言葉遣いも先生に対するものではなく、友だちに話しかけるようにタメ口で話かけてくる児童もいました。そこが、正直難しいです。

私は、昨年もスクールサポーターをしていたので、机間指導は慣れていました。それは、教育実習で大変役に立ちました。「よく子どもたちのことをみていますね」と先生からほめられました。スクールサポーターでの経験は今後の学級経営に役立つことと思います。

観察実習レポート

教育学科 4回生

若葉未来

1. スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

毎週、学校に行くと子どもたちの元気な挨拶にとっても元気をもらっていました。子どもと関わる中で、声掛けの仕方・個別指導の方法など、どうすれば子どもが自分の言ったことを理解してくれるかなど、たくさん分からないこともありましたが、先生方がとても優しくアドバイスをくださり、支援の方法を改善することができました。また、活動の中で子どもたちと外で遊んだことで、距離を縮めることができたと思っています。2年間、子どもたちと関わることができ、成長も感じることもできました。

②教師との関わりから得たもの

活動の中で感じたことは、先生は本当に忙しく、大変な仕事だということです。これは、昨年度も感じていましたが、今年度も改めて感じることも多くありました。朝、子どもたちを迎え、授業をおこなうだけでなく、学級経営もおこない、子どもたちが下校したあとも、明日の準備など作業に終わりが無い仕事だと思いました。しかし、その分子どもたちの笑顔であったり、成長を感じることもできたときには、本当に嬉しくてやりがいを感じることもできるんだと思いました。分からないことがたくさんで足を引っ張ってしまったこともあったと思いますが、いつも優しく接してくださった先生方に感謝しています。

③学校という組織との関わりから学んだこと

学校としての組織の中で、やはり共通理解するということがとても大事だと感じました。スクールサポーター校ではもちろん教育実習校においても、先生方が子どもたちの様子を伝えあったり、連携されている場面を見ることがありました。教員間で連携を図ることで、何かあった際にも迅速に対応することができると思います。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

今年度、4年生に入って、活動しました。3年生から個別指導についていた児童のクラスで主に活動していました。教員採用試験に合格することができ、4月から実際に教師として働くことになってからは、昨年度とは少し違った視点から先生方のことを観察することも多くなりました。昨年度は、はじめての活動ということもあり、子どもたちとの関わりでいっぱいになってしまい、先生の細かいところまで見る余裕がなかったこともありましたが、今年度は先生の言葉がけや、支援の方法など意識して見るようにしていました。その中でも、毎日の学級経営においては、自分だったらこんなことできないなあ！と思うような、自分もこのような対応をしたいと感じることが多くありました。その中でも、私が印象に残ったことは、自分たちでクラスの約束事を決めるために、先生はあまり口出しせず子

どもたちの意見を聞き、必要な時だけ意見されていて、子どもたち主体で話し合いが進められていることに、とてもすごいと感じました。子どもたちは、自分の意見を言うだけでなく、友だちの意見もしっかり聞いていて、普段の学級経営がとても大事だということを実感した出来事でした。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

私は、4月から教壇に立つ立場になります。スクールサポーターでは、補助的な役割でしたが、4月からは自分で学級経営をすることになります。このスクールサポーターでは、子どもたちとの関わり方・声のかけ方・支援の仕方を2年間にかけて学ぶことができました。まだまだ勉強不足ではありますが、このサポーター活動を経験しているのとしていないのとでは、私の考え方も大きく変わっていたと思います。4月からの教員生活では、常に子どもの目線に立って物事を考えられる教師、また子どもたちが夢を持てるような教育ができる教師を目指し、一生懸命頑張りたいです。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

今年度は、1学期が教員採用試験と重なっていたのでお休みさせていただいて、2学期から活動させてもらうことができたので、とてもありがたく思っています。そのため、困難に感じた点は特にありませんでした。

5. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

昨年度に引き続き、2年目の活動でした。1学期は、教員採用試験のため休んでいましたが、2学期の10月から活動でした。久しぶりの活動で、子どもたちが覚えてくれているか、とても不安な気持ちで小学校に向かいました。昨年度、3年生で活動させていただいていたのですが、今年度も4年生に進級した子どもたちと活動させていただくことになりました。担当クラスの教室に入ると、子どもたちが「若菜先生！」と言って、私のところに来てくれました。私のことを覚えてくれていたこと、そして名前まで覚えてくれていたことに、とても感激しました。半年ぶりに会った子どもたちは、成長していて、身体も大きくなっていたり、考え方も3年生の時とは違っているように感じました。その子どもたちと、毎週一緒に過ごすことができ、とてもたくさん元気をもらうことができました。

4月からは、実際に自分が教壇に立つ立場となり、今は不安な気持ちと楽しい気持ちが入り混じっています。しかし、スクールサポーターで子どもたちや先生方から頂いたお言葉や元気を胸に、頑張りたいと思います。

ボランティアを通して学んだこと

教育学科 3回生

木戸 奈津希

私が幼稚園のボランティアで学んだことは、「現場を知ることができた」ことです。実際に幼稚園に行くことで、講義だけでは絶対にわからない幼稚園での生活を見て、経験することができました。そしてそれが自分の実践力に繋がっていくと感じています。

初めにボランティアをさせていただくにあたり、副園長先生から「ボランティアといっても子どもにとっては同じ先生という立場。子どもと関わる身として責任をしっかりとって取り組んでください」というお話をしていただきました。実際に幼稚園で子どもと一緒に生活することは、子どもの健康や安全の管理や、子どもの保護者との関わり等でも教職員と同じように責任があります。少しの時間現場を任せられることがあったり、保護者からの連絡を受けたりと、責任を持って動かないといけないこともありました。そういった時に先生方に連絡・報告をするなど、一職員として責任と自覚を持つ大切さを実感しました。

子どもの生活や子どもの姿、発達についても学ぶことができました。一緒に遊ぶことで年齢での運動発達の違いやどんな遊びが好きなのか、何に興味があるのかということなどを知ることができました。年少クラスに入り保育補助をすることが多かったので、年少児が「ケンケン」をすることができるのか、お箸をうまく使えるかなど実際に子どもがしている姿を見ることで、より自分の中の知識としても吸収されたと感じています。そのため、模擬保育や設定保育をする時などでも、子どもの発達に応じた遊びを考えることができました。

私自身が子どもと関わって学んだことだけでなく、子どもと関わる先生方からも学ぶことがたくさんありました。ボランティアを始めた頃は、まずは自分なりに子どもと会話をしたり、遊んだりして関わりました。しかし、そうした中で子ども同士のけんかや、よく教室から飛び出して行ってしまう子どもなど、どう関わったらいいのか悩む場面もありました。そんな時に先生方を見て、けんかをした時は子どもを落ち着けて両方の話を聞くことや、「この子には叱るのではなくこういう言い方をすれば教室に戻れる」など、さまざまな場面での関わり方、そのテクニックを学びました。そして、また自分が子どもと関わる時に、「あの時はうまくいかなかったから次はこうしてみよう」というふうに考えて動けるようになりました。

幼稚園で子どもと一緒に生活することで、子どもと目線を合わせることや、子どもの気持ちを受け止めた声かけなどが自然と身に付きました。「すごいね」と言うだけでなく、「大きくて元気な絵が描けたね」「かわいい色のお花だね」など、私の声かけの幅が広がりました。子どもと関わっていると「そんな着眼点を持っているのか」と私の気づかなかったことにも気づかせてくれます。まだまだ子どもの気持ちを受け止めきれいななかったり、関わりが不十分なところがあったりと課題もたくさんありますが、これからも幼稚園でのボランティアを通して、子どもと一緒に私も少しずつ成長していきたいと考えています。